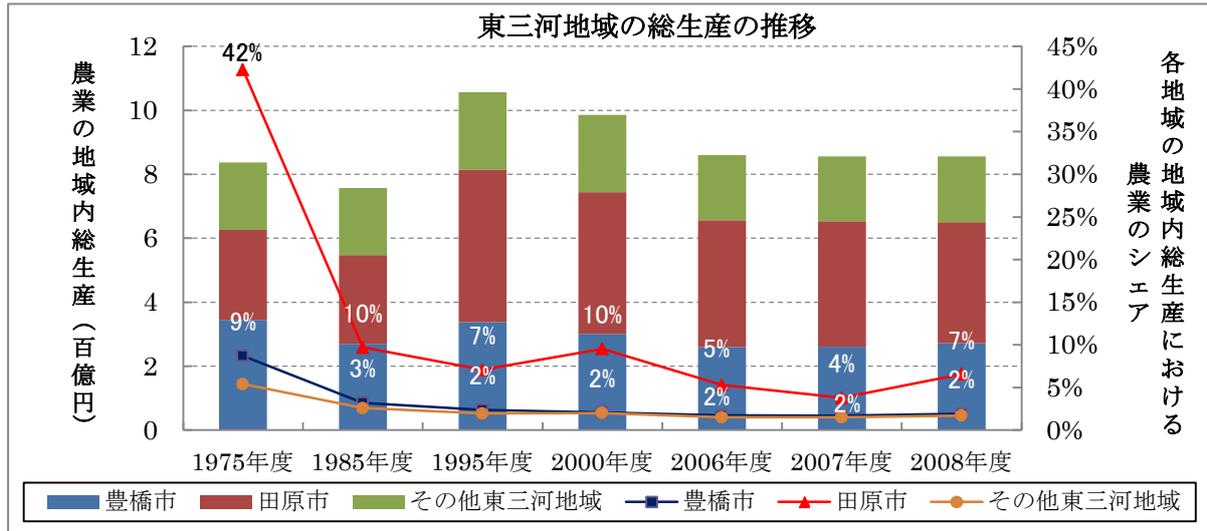


東三河地域の農業

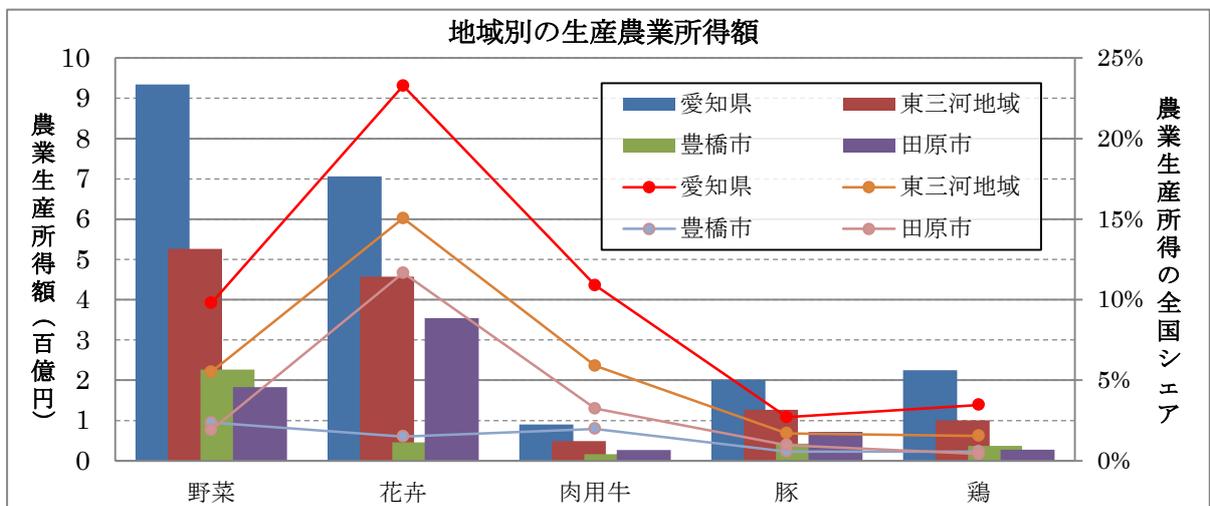
東三河地域の農業は、昭和 43 年（1968 年）に完全通水した豊川用水によって大きく変化し、それまでの露地農業から、施設を利用した施設園芸が爆発的に広がり、野菜のみならず、花卉生産の一大産地を形成するに至っています。特に、田原市の昭和 50 年における市内総生産に占める農業の割合は 42%を占め、その後自動車メーカーの進出により低下したものの、現在でも 7%と非常に大きな割合です。



出典：農林水産省(平成 18 年度生産農業所得統計) ※平成 18 年度以降本統計は無くなった。

東三河地域の農業のポテンシャル

平成 18 年における農業所得を見ると、愛知県における東三河地域の農業シェアは各品目において 5 割近くを占めており、野菜ではトマト、キャベツ等を栽培している田原市、豊橋市での生産が高い。花卉は東三河地域の 8 割近くを電照菊やガーベラを生産している田原市が占めており、田原市の花卉生産所得は全国と対比しても 15%と高い。その他東三河地域では、肉用牛、豚などを中心に、収益性の高い農業が行われている。



出典：あいちの市町村民所得(愛知県県民生活部統計課)

東三河地域の施設園芸は、その生産規模だけではなく、先駆的な工学的技術導入が進んでいます。既に、豊橋技術科学大学、豊橋市、田原市、民間事業者等の連携による施設園芸に資する研究開発施設が整備され、地域農業への技術移転が進みつつあります。また、農家でも光合成の要素である温度、光、二酸化炭素等の環境を制御した施設（植物工場とも言われる）整備が進んでおり、工学的な技術導入によって高付加価値、高品質の農産物生産が進んでいます。

(先駆的な施設園芸の研究開発施設)

光合成量の最大化を制御
インバーティブグリーンハウス:IGH



◆気候や天候の変化に対応し、光合成量(光、温度、湿度、CO₂等)の最大化を図る制御実証施設。風力発電設備等を設け、トマト生産量 50t/10a を目指す。

低炭素化の推進:田原市低炭素施設園芸づくり協議会モデル施設



◆低炭素社会の実現に向け、天窗ソーラーパネル、二重皮膜、LED、ヒートポンプ、複合環境制御を導入

(地域農家の取組事例)

デジタル・アナログ融合の胡蝶蘭栽培



◆温度・湿度・光等の環境制御(デジタル)と人の手によるかん水作業(アナログ)の融合

オランダシステム融合型の電照菊栽培



◆オランダシステムと農家の知恵の融合による気候環境対応型栽培の実施

エネルギー転換による食用小菊栽培



◆奥三河の森林資源を活用したペレットボイラーの導入

JA 主導の高品質ミニトマト栽培



◆JA 豊橋 イエローミニトマト研究会による農家間栽培情報交換による高品質ミニトマト栽培